

1. 志願動機: 現場で感じた構造的課題

私が貴研究科への進学を志願する理由は、就労移行支援の現場で10年以上感じてきた「アセスメント構造への根本的な疑問」を学術的に検討したいからである。

福祉の現場では、利用者の職業準備性を評価する際、確定診断された障害名と「本人の能力や意欲」という個人因子に焦点が当たりやすい。しかし私は、小児期の逆境体験や教育機会の欠落といった、障害に起因して蓄積された環境因子が、障害特性そのものよりも大きな阻害要因となっている構造を繰り返し日撃してきた。本課題を理論的に整理し、現場で活用できるアセスメントの枠組みを探索的に検討することが、私の研究目的である。

2. 研究テーマへの到達

私が取り組みたい研究テーマは、「累積環境因子」と「複式簿記メタファー」を統合した自己理解支援フレームワークの理論的検討である。

これは単なる理論的関心ではなく、現場で出会った利用者たちの「語れなかった物語」を可視化し、従来「自己責任」として見過ごされてきた構造的不利を可視化したいという実践的な動機に基づいている。当事者が自分のストーリーを自分の言葉で語れる状態への支援を、学術的に基礎づけたい。

なお私の目的は、「善意」というナラティブを前提とした当事者保護ではない。障害があることにより毀損された機会について当事者自身が理解し、自律的に選択できる支援が標準となることを目指し、SROI等社会的インパクト指標も博士課程において可視化することを視野にいれている。

3. 貴研究科志望理由

貴研究科を志望する理由は、私の研究アプローチとの親和性が高いからである。

第一に、通信制という形態は、現場を保持しながら理論と実践を往還できる環境を意味する。支援現場から離れた理論構築ではなく、日々の実践から生まれる問い合わせを即座に学術的検討へ接続できることが、研究の妥当性を高めると考えている。

第二に、貴学が掲げる「ふくしの総合化」という理念は、私の領域横断的アプローチと軌を一にする。ICF、ケイパビリティアプローチ、会計学の概念を福祉領域に統合する試みは、まさに総合的視座なくして成立しない。貴研究科の研究指導体制のもとで、この統合を深化させたい。

4. 修士課程での目標と修了後の展望

修士課程では、累積環境因子が職業準備性に与える影響構造を探索的に検討し、仮説モデルとして整理することを目指す。

25年間の実務経験の蓄積がある今だからこそ、経験則を学術知へと昇華させる責務がある。修了後は、構築した理論枠組みを支援者向け研修プログラムや現場でのアセスメント実務に展開し、「個人因子偏重」から「累積環境因子の統合」への転換に貢献したい。

また、国際的な議論との接続も意識している。私は障害者とAI倫理の国際的イニシアチブである Disability Ethical AI Alliance 創設者の Susan Scott-Parker OBE 氏と連携を開始しており、本研究の知見を国際的な文脈でも発信していく展望を持っている。